

6月16日「遠慮なくいかせてもらいます！」使徒言行録2:14~21、ルカ福音書10:17~24

5月の終わりから、2週続けて教会を空けることになりました。いつもとは違う牧師の説教を聞く機会となったと思いますが、皆さんにとってどうだったでしょうか？先週、その感想？というか説教全般についてある教会員の方からこんなことを言われてびっくりしました。

「先生の説教にはどこかまだ遠慮があります。就任して3年も経つんだからそろそろ言いたいことはもっとはっきりと言われた方が信徒も問題を自覚出来て良いですよ・・・」

私の謙遜で慎み深く控えめな性格が裏目に出てしまったのでしょうか！？（冗談です）、自分としてはけっこう踏み込んでいるつもりだったのですが、新鮮でした。そして、そのことが今週の使徒言行録を読んでいて私が引かかったことと全く一緒だったので、驚いたのです。

今日は、先週に引き続き、使徒言行録からペンテコステの出来事を聞いています。イエス様が天に昇られてから身内だけで集まって祈りの日々を過ごしていた弟子たちのところに、ついにイエス様が約束してくださった聖霊が降ります。イエス様の昇天から40日目、イースターからちょうど50日目のことでした（だから50を意味するペンテコステと呼ぶ）。弟子たちは聖霊に満たされ、様々な言葉でイエス様のことを語るようになりました。先週は5か国語で聖書を聞きましたが、たった5か国語であってもとても新鮮で不思議な気持ちがしました。それがもっとたくさんの言語であれば異様な光景に写ったことでしょう。周囲の人たちが「**13節 あの人達は新しいぶどう酒に酔っているのだ**」と思ったのも無理はありません。ちょうど、その日は五旬祭というユダヤ教のお祭りの日でもあったのです。

さあ、今日のところでは聖霊に勇気づけられながら、弟子たちを代表して1番弟子のペトロが立ち上がって大きな声で話し始めました。ユダヤ教の習慣では、教える人は座って話しますので、ペトロはユダヤ人のようにではなくギリシャ人やその他の文化の人たちに合わせて語ったのです。まず、ペトロが話したのは周囲の人たちの誤解を解くことでした。

「**15~18節** 今は朝の九時ですから、この人たちは、あなたがたが考えているように、酒に酔っているわけではありません。そうではなく、これこそ預言者ヨエルを通して言われていたことなのです。『神は言われる。終わりの時に、／わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたたちの息子と娘は預言し、／若者は幻を見、老人は夢を見る。わたしの僕やはそのためにも、／そのときには、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。』

ペンテコステ、神さまの聖なる霊が降った出来事は突然起こったおかしなことではありません。遥か昔に預言者ヨエルを通して語られた神の言葉の実現だったのです。その聖霊の力を

借りてペトロは最も大切なことを人々に伝えました。彼が語ったことを要約すると、この1文になるでしょう。

「36 節 だから、イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。」

皆さんはどう思うでしょうか？私は「良くそんなにはっきりと言えたなあ」と思います。ユダヤ人たちに向けて、「神の子を十字架につけた責任はお前たちにある！」と言うのです。聴衆が怒りだすかもしれません。最初の話ではないですが、ビビりな私には到底語ることは出来ません。

「言葉を濁す」「オブラートに包む」なんていう言い方もありますが、私たちは時に相手を気遣ってはっきり伝えないことがあります。それは、余計な争いを好まない、平和的と言えば聞こえは良いですが、相手が自分の言葉を受け止めきれないだろうと相手との信頼関係が出来ていないとも言えます。私の説教に「まだ少し遠慮がある」と語ってくださった方は「もっと私たちを信頼してよ！必ず受けとめきれよ！」と伝えてくださったのかもしれませんが。もう少し自分を振り返ってみると、私の説教に遠慮があるように聞こえるとすれば、私が自分にそこまで自信を持っていないからだろうなとも思いました。説教というのはある意味、自分の親や祖父祖母の世代の人たちに対して「上から」語ることもあります。やっぱりまだ、絶対の自信を持っていない自分を改めて認識させられます。

自分に置き換えることはこの辺りにして、やはりペトロはこんなに厳しいことを良くはっきりと聴衆に語る事ができたと思います。そこには相手に伝わるはずだという信頼が必要です。そして何より、自身が語る言葉に対する絶対の確信がなければならないのです。ペトロはなぜ、こんなにはっきりとイエスの死について語れたのか？それは、それこそが救いの物語の始まりだからです。

「23～24 節 このイエスを神は、お定めになった計画により、あらかじめご存じのうえで、あなたがたに引き渡されたのですが、あなたがたは律法を知らない者たちの手を借りて、十字架につけて殺してしまったのです。しかし、神はこのイエスを死の苦しみから解放して、復活させられました。イエスが死に支配されたままでおられるなどということは、ありえなかったからです。」

十字架の死、それも含めてすべて神の救いの計画の一部だったのです！この確信、この自信、これまで身内だけで引きこもって祈っていた人の態度とは思えません。ですからやはり、ペトロをここまで語らしめたのは聖霊の力なのでしょう。ペトロは聖霊の助けを借りて、やっとまっすぐにイエス様の復活の出来事を喜びと救いの出来事だと信頼することができたのです。

ところで、皆さんも、そして私も、イエス・キリストの名によってバプテスマを受け、同じ聖霊を与えられているはずですが。私たちの現実はどうでしょうか？

先日、金融庁が発表した人生 100 年時代に夫婦二人で生活するには公的な年金だけではまかなえず、蓄えが 2000 万円必要だという試算に、多くの人から不安と心配の声が上がりました。収入は減る、税金は上がる、どうすりゃいいんだよと、心配が絶えません。この数日、『AI vs 教科書が読めない子どもたち』という本を読みました。近年コンピューターの性能が上がって、将来的には今人間がしている多くの仕事をコンピューターがするだろうと言われています。その未来に人間が対抗するにはどうすれば良いのかを詳細に検討した数学者の本です。そこでもやはり多くの人々が職を失うだろうと予測されていました。心配は絶えません。数十年前までに社会全体が上向きで何か明るい雰囲気のある時代とは変わって、今、私たちは先行き不透明な時代を生きています。キリストを信頼する群れである教会に属していても、皆さんの中にも将来に不安や心配を抱えている方は大勢おられるでしょう。私自身もその一人ですし、神の家族に属していても世のあれこれに振り回されながら心配を抱えている現実もあるのではないのでしょうか？

今日の説教を考えながら、私は教会の牧師になろうと決断したときのことを思い出しました。私は大学院生の時に、アメリカに 1 か月教会実習に行きましたが、そこで牧師になる決意を固めたのです。その時には丁度 3 つの日本語教会で説教をさせてもらったのですが、サンフランシスコ郊外にあったパイン教会での光景に驚いたことを覚えています。パイン教会は人数が 10 数名と大変小さな教会です。(アメリカはキリスト教国ですから教会員数は 100 名を切ると小規模と言われます。中には毎週何千、何万人も集まるメガチャーチもあるので) ですから、日本語の出来る牧師を招聘することがなかなか難しく、私が行かせて頂いた時も、そこは無牧となって何年も経っている状態でした。その教会が無牧となった時、教会はある二択を迫られました。一つは英語の牧師に来てもらうこと。もう一つは、日本の牧師に日本語の説教テープを送ってもらい、それを説教の時間に流すこと。英語か、テープか、皆さんだったらどちらを選びますか？私だったら、間違いなく英語を選ぶと思うのです。やっぱり実際に人に語ってほしいじゃないですか？ところがパイン教会はたとえテープに録音されたものでも日本語で説教を聞くことを選んだのです。

そこにはどんな思いがあるのか・・・母国語での御言葉への飢えです。そこに集まっておられる方は何年もアメリカに住んでいて、英語はペラペラです。それでも英語の世界ではどことなくよそ者で、いつも疎外感を感じながら生活しています。そんな人たちにとってみ言

葉と信仰はなくてはならないものなのです。人生を支える大切なものなのです。その支えはやっぱり母国語で聴きたい。たとえ録音でも最も親しんだ母国語で聴きたいのです。私のへたくそな日本語説教と慣れない祝祷を心から喜んでくださった人々の姿は今でも忘れられません。私はこのアメリカの小さなキリスト者の集まりの姿に心を打たれました。これほどまで御言葉に信頼を寄せている人達があるのか・・・父を見ていたから牧師の仕事がしんどいことは分かっていました。教会は高齢化が進み、様々な面で厳しい現実があることも知っていた。だから迷っていた。でもこの出来事を見て何かが吹っ切れた。そうだ！大丈夫だ！神の御言葉はそれほど信頼にできると思えたのです。こちらの教会に来て最初の祈禱会で出会った言葉を思い出します。イザヤ 30 : 15「神はこう言われる『お前たちは、立ち帰って／静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある』」

ペンテコステの日、天から聖霊が降り、弟子たちが様々な言葉でイエス様のことを証しし始めた日、その出来事を目撃したのは、エルサレムに住む、「天下のあらゆる国から帰って来た、信じ深いユダヤ人たち」でした。それは、バビロン捕囚以来、あらゆる国々に散らされて生きるしかなかったユダヤ人たち、言わば悲しい宿命を負った人たちでした。いつも祖国イスラエルを思いながら、他の国で育った人達です。そして、念願がかなってようやく帰って来たエルサレムでも、言葉の壁に阻まれてどこかよそ者であると感じていた人たちです。彼らは自分たちの母語で、救いの御言葉が語られるのを聞いてどれほど嬉しかったことでしょうか？41節を見ると、この日にペトロの説教を聞いて、洗礼を受けた人は3000人も居たとあります。もちろん使徒言行録の著者による誇張された数字ではあるでしょう。でも、自分たちの母語で語られる福音に心動かされる人が大勢いたことは確かなのではないかと私は思います。最初の教会はそうやって人々の心の飢え渇きに気付き、彼らに最も届く仕方です。イエス・キリストの福音を伝えたのです！

私たちも大切なことは遠慮なく語りたい！ごまかさず、誠実に真つすぐに！キリストは復活された。私たちの罪を赦すために復活された。私たち一人一人を心から愛しておられる！と。私も時に弱気になり、遠慮して言えなかったり、婉曲して伝えることもあるかもしれませんが。それでも本当に大切なキリストの救いの出来事はこれからも隠さず、臆さず、はっきりと語っていきたいと思います！キリストが私たちを愛されている。私たちがこの方に招かれている。それはなんて素敵なことなのでしょう。時には世の力に屈して不安と心配に揺さぶられることもある。けれども、私たちにはキリストが聖霊を注いでくださっています。私たちの心はその度に熱くされるのです！この方に信頼する人生はなんて輝かしいものなのでしょう！今日も救いは皆さんと共にあるのです！喜んで伝えていきましょう！